

空襲被災体験

大阪府堺市 猿渡 慶喜

私にとって50年前の戦争は、大東亜戦争と教育され、尋常小学校2年生の時に始まり、国民学校6年生の時に終わった。私の住んでいた大牟田市は、軍需産業の石炭化学工業地帯であったので、爆弾攻撃2回、焼夷弾攻撃2回の空襲を受けた。また終戦の年の夏は、艦載機の機銃掃射は日常茶飯事となっていた。

子供の頃の小さな脳裏に強烈に焼き付いているのは、やはり空襲被災体験である。

第1回空襲は昭和20年初夏だったと思うが、この頃になると高々度のB29が悠々と飛行機雲をひいて編隊飛行する光景は珍しくなくなっていた。ある日中、工業地帯の爆弾攻撃が行われた。防空壕の中にいると、遠方で次々と落雷があっている感じだった。その外れ弾が鳥塚の宇佐病院の防空壕を直撃した。警報が解除された後、沢山の人々の後にくっついて、その被害を見に行った。大きな爆発の穴、メチャクチャに壊された家、飛び散った人肉片、飛ばされた大きな石臼、これらを初めて見て爆弾の威力に驚き、戦争の将来に不安を感じて帰った。

第2回目は昭和20年6月夜、B29、60機による焼夷弾攻撃である。空襲警報が鳴った時はもう敵機は頭上であった。灯火管制の真っ暗な空間に、爆音と同時に照明弾が何発か落とされ、閃光が煌き空一面が真昼のように明るくなった直後、焼夷弾が間断なく落され始めた。焼夷弾は1個の大きな塊として落ちて来て、地上近くで数十個に分散するやつだ。中身は油脂でグリースみたいなものだ。火が付いたグリースをばらまく仕掛けだ。焼夷弾の落ちる光景は、遠目には花火大会にも似て非常に綺麗であった。後日分かったことだが、敵機は大牟田市域を広いと感違いして、有明海域まで焼夷弾をばらまいていた。

第3回目は忘れもしない昭和20年7月27日、真夜中のB29による焼夷弾攻撃である。

今回も空襲警報のサイレンと敵機の照明弾は同時であった。敵機編隊は、途中目標があり危険度の少ないルート、即ち天草上空を通り、雲仙上空から有明上空を北上するらしく、当時はレーダーがなく発見が困難だったと思われ、空襲警報が遅れがちだった。

家族全員が飛び起きて蚊帳を引きちぎった。たちまちB29の爆音、高射砲の発射音、シュルシュルシュルという焼夷弾の落下音、爆発音が聞かれた。パチパチという家屋の燃える音、真っ赤な空、探照灯の光、「助けて、逃げろ」という人の声、この世は炎の地獄と化した。

私の家にも焼夷弾が数個落ちた。父と母は布団や毛布で消火作業をしていたが、次々に飛び散る焼夷弾の火の付いた油脂は消せるものではない。炎を消そうとたたくと更に広がる。この時父が焼夷弾の破片で「やられた」と叫んで倒れた。そして「皆逃げろ」と叫んだ。個人の家で造った防空壕は貧弱でほとんど役に立たない。燃え盛る家を後に、防空頭巾の上に更に布団をかぶってとにかく必死で逃げた。隣の屋敷に大きな柿の木があった。その柿の木の下には既に近所の家族が逃げて来ていた。私達がそこに着いて数秒後、直ぐ近くに焼夷弾が落ちた。1

mと離れていない位置で、焼夷弾の破片が高女2年生の少女の頬をえぐった。狂声の方を振り向けば、うす暗闇の中でえぐられた頬は白く見えた。次の瞬間、出血によって黒くなった。

「ここも危い。たんぼへ行こう」ということになった。

家の裏にはまだ水を湛(たた)えた水田があった。水田の畦に腹這いになり、水びたしの布団をかぶって、息を殺しじっと我慢した。布団のすきまからそっと外をのぞけば、遠くには炎を引いた焼夷弾が落ちているのが分かった。水田が安全と思ってか近所の人も大勢避難して来た。畦に腹這いになっている私の頭の先20cm位の所に、お婆さんの脚があった。一瞬、その足首が不発焼夷弾の直撃でやられた。ちぎれたのである。私はもう死んだ気持だった。できるだけ身体を小さく丸めた。その場所はいささきまで、私の頭が布団から出ているので危ないからといって6才年上の姉が背後から布団の中に引きずり込んだ直後だったのである。お婆さんの家族は「お婆やんの足首がちぎれた。誰か助けて下さい」と叫んでいたが、皆どうすることもできず、とうとうお婆さんは出血多量で死んでしまった。生死の別れは本当に紙一重である。

空襲が終わり夜が明けてみると、皆泥だらけの顔で衣類は泥水でズブ濡れであった。私の家は完全に灰になっていた。情けなかった。だが命だけは助かったことに安堵した。幸い、父も負傷してはいたが命だけはあった。その後、リヤカーに乗せて機銃掃射を避けながら、長い間の病院通いが始まるのであるが。

翌朝の新聞には「昨夜大牟田にB29、60機来襲」とあった。近所と小学校の被害を見に行った。ほとんどの家屋が焼失したので、何だか空間が広くなり、見晴らしが良くなったような気がした。小学校の校舎はもはや焼け落ちていた。校庭には沢山の黒こげの死体が運ばれていた。近所で内臓の破裂した死体も見た。感傷などわく心の余裕はなかった。明日は我が身かも知れないのである。後日、校庭に集められた死体は油をかけられ、そこで荼毘(だび)に付されたと聞いた。

第4回目は終戦も間近い8月、昼間の爆弾攻撃である。この頃は米軍の艦載機は白昼堂々と毎日のように飛来していた。大牟田には三個所に高射砲陣地があった。その日は遠くで入道雲がわき上る快晴で、昼過ぎであった。敵機のルートは決まっている。いつものルートを3機編隊の三角形をなす状態で、轟音を響かせ飛来していた。久留米か福岡を空襲する積もりだったかもしれない。大牟田の高射砲が火を噴き始めた。大牟田の高射砲は今まで敵機を墜したことがない。どうしたことか、編隊の最先頭機に命中したのである。煙を引いて墜ち始めた。そして編隊は、蜂の巣を突いた時蜂が人間を襲うように、耳をつんざくような急降下音を唸らせながら爆弾と機銃の雨を降らせ始めたのである。この時ほど、急降下音を無気味に感じたことはない。後日聞いたところによると、敵機は桜町に墜ち高射砲隊にも死傷者が出たとのことであった。

それから数日後玉音放送があり、日本は降伏し、太平洋戦争は終わったのである。